



特223
305



始



特 223

305

大正十三年三月五日
大正十三年三月五日

特 223
305



伊賀越道中雙六筋書

伊賀越道中雙六筋書



伊賀越道中雙六

目次

岡崎雪降の段	………	一話
同 註釋	………	二話
○ 伊賀越道中雙六筋書	………	一話
繪 錦		
鏡 狐 娘 一 頁 切		



政右衛門はお谷を離別して、お谷の妹でおのちといふ七つになる女の兒を嫁に貰つた。それで和田親負との縁が結ばれたから、敵討御免の願ひが出せる譯だ。お谷とは出来合ひの仲であるから。——此の一幕を俗に飯頭娘といふ。

解附義太夫名曲全集
稽古本

伊賀越道中雙六

岡崎雪降段

既に其夜もしんくと、遠山寺に告渡る、早九ツのかねてより、
内の案内は知たる眼八裏から忍んで納戸口、思はず躓く明敷
の、駄荷のつゝらを幸と、あたふた押明忍び込、鼻息もせず窺ひ

居る斯とは人も白雲の道もいとほぬ政右衛門心も關の忍び
道遁れて急ぐ跡よりも數多の捕人が見へ隠れしたふ足跡氣
轉の唐木兩腰そつと道端の雪搔集め押隠す透もあらせずば
らくらく腕を廻せと追取卷

『ヤア仔細も云ず理不盡に繩かゝるべき覺はない』

といはせも果す双方より捕たとかゝるを引ばづし苦もな
く首筋一つかみ一振ふつて右左弱腰蹶すへて狗投透間を得
たりと二番手が肘がらみをふりほどきほぐれを取て眞逆様
頭轉胸骨雪道に打付られて叶はじと入かはりたる三ばん手
打込十ていかいくり脾腹をてうど眞の當烈しき手練にさ

しもの組子さうなくも寄付ず跡じさりする斗なり。見かね
てかけ寄捕人の小頭

『ヤア上意によつてむかひし我々手向ひなすは關破りの浪
人者に相違はない腕を廻せ』

と詰かくれば

『ヤア麓忽なりお役人急用有て此如く夜道を急ぐ旅の者丸
腰の某を關所を破りし浪人とは身に取て覺へぬ難題外を御
詮議なされよ』

とちつ共恐れぬ丈夫の行跡始終を見届幸兵衛は戸口をか
け出押隔て

「憚ながらお役人へ申上る、關破の御詮議半深夜に一人歩行の旅人御疑ひは御尤併此者は鎌倉飛脚仔細有て此幸兵衛能存じ罷在ば、慮外の段は御用捨有て、無難にお通し下さらば有がたき仕合せ」

とかばふ詞に政右衛門、

「ムウさいふこなたは何人」と云を打消し、

「イヤサ、コリヤ身に覺へないにもせよ、お役人に慮外の手向ひ、ア、不届至極」

と呵り付しづくくと歩寄り、倒れ伏たる組子共、引起して死活のいけ、「いづれもお心遣にござるか、お役目御苦勞千萬」と、

にがい挨拶氣の付捕人。幸兵衛猶も威儀を正し、

「承はれば關所を破りし科人は帶刀の浪人者、彼は町人此丸腰、憚りながら人違へ、かやうな義に隙取中、彼曲者を取逃さば詮なき事、早くお手當なされよ」

と、云れて實もと捕人の小頭「ハ、ウ其方が存せしと申詞に相違も有まい、是よりは山手へかゝり、彼曲者を詮議せん、家來參れ」と引連て、元來し道へ引かへす。影見送つて政右衛門、
「ハ、ア危ふき場所を遁しも、全く貴公の御厚志故、がお禮は重ねて、心もせければ失禮ながらお暇申す」

と立上るを、暫しととゞめ、「昨今なれど折入てお尋申す仔

細も有ば、見ぐるしけれど拙者が宅へ暫時ながら』と老人の、
詞に是非なく政右衛門、然らば御免と打通れば門の戸引立主
の幸兵衛、傍近く差よつて、

『多勢を相人に今の働き、感心の餘り役人を欺歸し、難儀を救
ふは身共が寸志、それに付てもいぶかしきは貴殿の柔術、正し
く拙者が流儀に同じき神影の極意、手練せられし旅人は』

といぶかる色目、こなたも不審、『神影流の極意なりと見極
られし御老人、ハテ心憎し』と双方が、ためつすがめつ見合
す顔

『ム、お別れ申て十年餘り、相好は替られしが、生國勢州山田

にて、武術の御指南下されし、要様ではござりませぬか』

『オ、其詞で思ひ出した、我勢州に有し節、幼少より育上げし
庄太郎で有ふがな』

『成程く、然らばあなたが』

『其方が』

是はく、と手を打て、盡ぬ師弟の遠州行燈、かき立く、打な
がめ、『オ、稚顔に見覺有る庄太郎に相違ない。ハテ健かに
生立しな』

『ハア先生にも御賢勝で』

『オ、サく無事の對面互ひに満足、去ながら、ア、思ひ廻せば

過行月日、其方は山田の神職荒木田宮内が忤なれ共、幼少の砌、
 父母に離れ孤となる不便さに、手鹽にかけて育てる所、稚立より
 武藝を好むは、末頼もしく思ふより、門弟共へ稽古の次手、一手
 二手と教ゆる中、一を聞て十を知頓智といひ器用といひ、十五
 以下にて槍術、劍術、鎖鎌、體術、柔に至る迄、諸歴々の弟子を追拔、
 神影の奥儀を極る無双の達人、何卒大家へ仕官いたさせ、親の
 氏をも繼せんと、心頼みに思ふ中、未熟の師匠と見限りしか家
 出致して十五年、便なければ折にふれ、此庄太郎はいかゞ成し
 と、雨につけ風につけ思ひ出さぬ事もなく、夫婦打寄そちが噂。
 シテ只今の住所は何國、有付逆もあらざるかと、師匠の慈悲に

政右衛門思はずはつと手をつかへ、

『親にも勝る大恩の、師匠を見限家出せしと御疑ひは去事な
 れど、常々武術の御講釋、小耳に覺ゆる其中に、一派に心を凝さ
 んより、諸流に渡り修行をなすこそ、此道の心がけと御教訓心
 魂にしみ渡、十五歳にて國を出暫く諸國を遍歴し、武術を磨く
 武者修行、天運に叶ひ然るべき主取も致せしかど、生れ付たる
 好色者、亂酒に主人の機嫌を損じ、只今は元の浪人、たよるべき
 方もなければ、もし上方に有付もやと、心ざして參る所思ひ掛
 なく、先生に面目もなき對面と、うかつにそれと身の上を、云ぬ
 底意はしらがの母様子聞てや、一間を立出、

『オ、庄太郎か、テモ成人仕やつたの、連合の眼鏡に違はぬ武藝の上達、器量を見込で頼たい仔細が有』と聲をひそめ、『そなたの家出した時は三つ子のアノお袖もふ十七に成はいの。縁有て云號の其聲殿を親の敵と付ねらふ者が有故、まさかの時の後楯力に成て下さらば、餘の人千人萬人にも勝つて嬉しう思ひます』

『オ、いかにもく、庄太郎と知ぬ先難儀を見兼ね救ひしも、其義を頼まん下心』

と、師匠の詞聞もあへず、政右衛門摺寄て、『ムウ其付ねらふ敵の假名は』

『オ、聲といふは上杉の家來、澤井股五郎といふ侍付ねらふは和田志津馬と聞た斗面體はしらね共、高で知たる若輩者、幸兵衛片腕にも足ぬ相人が爰に一つの難儀といふは、きやつが姉聲、唐木政右衛門といふやつ、音に聞へし武術の達人、譬五十人百人加勢有、逆政右衛門には及ばぬく、まだしも唐木に立合んは、其方ならで外にはない、何とぞ聲に力を添助、太刀頼む庄太郎』

と、餘儀なき頼みに政右衛門、『先生に内縁有股五郎殿に力を添れば、少しは師恩を報ずる理り、いかにも助太刀仕らふ、サ此上は澤井殿が隠れ家へ御案内』と、せき立唐木忍びの眼八、

蓋押明て指覗く影をちらりと見付ける幸兵衛心付ねば、

『ヤレく嬉しや、庄太郎の今の詞聞たからは千人力、ドレ鞞殿へ』と立上るを、

『ハテ扱いらざる女の指出、股五郎殿の行衛は知ぬ、ナ、ハテ壁に耳有世の諺、それと髓にしらね共、云聞すには折が有ふ、うかつにそれと明されぬ、咄しの蓋は取ぬが秘密』

とどうやら一物歩きの小助門の戸叩いて、『申く、庄屋殿から急な御用、只今お出』ととんきよ聲。

『ハア又關破りの詮議で有ふ、いやと云れぬ役目の不肖』といひつゝ、羽織引かけて嗜む大だち差こなす、腰もかゝみし海

老錠を葛籠にしつかと、『コリヤ女房、今も云た咄の蓋、戻つてくる迄明ぬ様、心におろした此錠前、ナ合點か』

と詞の謎聞女房もとけやらぬ、雪道いとはぬ高足駄、指傘の骨組も人に勝れし五調作り、歩きを先に幸兵衛は心を残して出てゆく。

『戻らしやる迄寝られもせまい、絲績ぎながら咄しませう』

『ハア今に御上根な事、マア火にお當りなされませ、私も是から下男同然におつかひなされて下さりませ』

『何のいの、こな様は大事のお客、マア煙草吞でゆるりつと寝轉んだがよいわいの』

「イエ／＼勿體ない、師匠の内、ホンニ此煙草はどこから参つた」
「ソリヤ親仁殿が旅戻りに貰てござつた上方煙草」

「ハアあなたのお口に合のなら、服部か國分か、此天氣に斯して置たら濕りましよ、留主事に刻んで見ませう、幸に爰に切臺
庖丁底に劔の葉拵へ、敵を聞出す煙草の小口、葉卷手早くきり
／＼と、大の體を小廻の奉公ぶりも哀れなり。」

外は音せでふる雪に、むざんや肌も郡山の國に残りし女房
の思ひの種の生れ子を、抱てはる／＼海山を、たどり／＼て岡
崎の宿より先に日はくれて、いづくを宿と定めなく、がほと轉
ればわつと泣子をすかす手も冷氷る、雪の蒲團に添乳の枕、い

んのこ／＼／＼に友さそふ、犬の聲々、夜廻りの番が見付る小
提燈、

「ヤイ／＼軒下に何で寝るのじや、きり／＼いけ」と呵られて、
「ハイ／＼／＼私は秩父坂東廻る順禮、癢でおなかをいたためま
する、ちつとの間置しやつて」

「ア、順禮でも幽霊でも、在の中に寝さす事はならぬ／＼、意
地ばるは猶うさん者、棒いた／＼くな」と提燈突つけ、見るつま
はづれの尋常さ、白眼だ眼うつかりと細目に明る戸の透間、内
から覗く夫婦の縁、思ひがけなき女房お谷、ハツと恟り指合せ、
包む我名の顯れ口、悪い所へ切かけた煙草の双金、胸を刻むと

人知ず、

『フウ見た所が、小盗する風俗共見へぬ、此雪に乳呑子かゝへ難儀じや有、どこぞ後生氣な所を頼んで泊てもらはしやれ、エ、見れば見る程比合なゑい女房獨寝さすは残念なれど、此方も寒氣にとちられ、瘦畑の鬼灯であつたら物を見遁す事』

と、呟き歸るも頼なき、人の詞もせめての頼み、火影を力戸口に這寄、『幼い者をつれた順禮でござります、お情に今宵一夜さお庭の端に』と斗にて、癪にくるしむ息切の聲に主は涙もろく、

『いとしや癪持そふな門中に寝てはたまるまい、泊てしんじ

「ま」

と立て行、なむ三寶と裾引留、『ア、是は又龜相千萬、此お觸のきびしい中、殊にお役柄の此内、どこの者やら知もせぬに、めつたに引入、跡の難儀はどふなさる、急度よしになされませ、夜中に一人歩行女ろくな者ちやござりませぬ、戸を明すとばい逝したがよござります』

『いか様のふ、親仁殿の留主の中は用心が肝心、コレく旅人、いとしけれど一人旅を泊るは御法度、御城下の中は軒下にも寝る事はならぬ程に、宿はづれの森の中へ往て寝やしやれ』
と、和らかに云て引出す絲車、歌こいといふたとて行れる道

か、道は四十五里波の上。

「ハアどこへ行ても一人旅は泊てくれふ様もなし、はるく
の海山も此子の顔を旦那殿に見せたいと思ふ精力で、産落す
から此已之助、漸く忌も明や明ず、國を立てついに一夜、家の
下で寝た事がなけりや、身はならはしと山寺の鐘がなれば寝
る事にして、星の光りをもし火と思ふて寝入ど今夜のくら
さ、氷の様な此肌で、寝ぐるしいは道理じやはいの、殊更癩で乳
ははらず、雪にこゝへ雨にうたる、つらさは骨にこたゆれ共、
旦那殿や弟が敵を尋る辛抱は、まだくくこんな事では有
まいに、其艱難にくらべては、雪はおろか劍の上にも、寝るのが

せめて女房の役、氣は張詰ても此癩の重るに付ては二人の身
につかれの病が起りはせぬか、萬一悲しい便やなど聞たら、何
とせふぞいのふ頼み上るは觀音様、弟夫の武運長久、我子の命
息災延命、未練な事じやが私も、此子を夫に渡す迄は生て居た
い、死ともないと、傍に夫の有ぞ共、しらぬ不便さくひしはる、喉
に熱湯内外に、水火の責苦雪霰、子を濡さじと抱しめく、天道
哀白雪の積り重る旅、勞れ癩と寒氣にとちられて、アツと一聲
氣を失ひ、どうと倒れし物音は肝にこたへて、なむあみだ、南無
阿彌陀佛も口の内、今のは何ぞと主の母、戸を引明れば、ばつた
りと、身は濡鷺の目はどみたり。

「こりや眩暈がきたのじゃはいの、エ、いちらしやどふせふぞ、夫よ幸此氣付」

と、とつかは文庫に用意の薬、

「ア、申、そりや御無用になされませ」

「なぜにいの、こりや親仁殿の道中で持しやつた結構な氣付」

「サア其結構な氣付を、非人同然の者に吞して、それでも氣の付ぬ時はかゝり合に成ますぞへ、此儘にしてほり出してお仕廻なされませ」

「じゃといふてどふ見捨になる物、アレ可愛や乳をさがして泣はいの、せめて此子を殺さぬやうに、奥の炬燵であたゝめて

やりませふ」

風に當じと寝卷の繻絆、あかの他人は慈悲深く、比翼とかはす女房を、むごふ引出し戸を引立、奥口見廻し、さし足し、勝手は見置釜の前、付木の明り見咎めて、人は何とか云柴を、そつと隠して門の口、ふしたる妻に氣を付る、柴の焚火のあたゝまり、噛しめる齒を押し割て、雪に濕す氣付の一滴、耳に口寄聲かすめ、お谷といふも憚りて、心の中で呼生る、夫の誠通じてや、うんと一聲、「氣が付たか、コリヤく女房」

「ハア、ヤアく政右衛門殿かいの」と云を押へて、

「何にもいふな、敵の有家手が、りに取付たぞ。此家の内へ

身共が本名けぶらいでも知されぬ大事の所そちが居ては大望の妨害しく共こたへて、一丁南の辻堂迄這て成共行てくれい、吉左右を知すまで、氣をしつかりと張詰て必ず死るな、サア早ふ行く」

と、夫の詞は千人力、「観音様の引合せ、おまへにあふたは人參熊膽、エ、忝いく、がぼんはどこへ」

「氣づかひすな、坊主は奥で寝さして置た。ソレく向ふへ來る提燈、見付られな早ふく」

とせり立れど、此年月の悲しさと嬉しさこふじて足立ず、杖を力に立兼る、とやせんかたへに脱捨し、菰に積りし雪の儘着

せて人目をくらき夜を、ほかく戻る達者親仁、

「オ、お歸りなされましたか」

「オ、庄太郎、寒いに門に何して居る」

「イヤお歸りが遅い故、お迎ひに出かける所」

「ナンノ迎ひには及ばぬ。こりや門口に柴のもへさし、非人

共が業で有ふ、不用心な」

と見廻す提燈、「イヤ私が」と取る拍子、わざとばつたり、

「コリヤ鹿相」

「だんないく、きつい風です、すでに道で取れふとした、まだもゑい所で火が消た」

といふもこたへる疵持足、天氣も大方上り口庭から足ふく下駄直す師匠思ひに機嫌顔。

「イヤなじみ程結構な物はない、是から緩りと夜と俱に咄そふ、いよく最前頼んだ事、違變はないの」

「是はお師匠共覺ぬくどいお尋心元なふ思し召なら、なまくらでない魂を、只今金打」

「ア、コレ何のそれに及ぶ事」

「及ばぬとおつしやつても、お頼みなさるゝ本人の股五郎殿の有家御存じないとおつしやるは、お師匠の詞に鞘が有かと存じられ頼まれるに力がない、ナント左やうじやござりませ

ぬか」

と探る心の奥より女房稚子抱き走り出

「コレ親仁殿最前行倒の順禮が抱て居た此乳呑子、今肌を明て見れば、守りの中に此書附和州郡山唐木政右衛門子巳之助と書て有はいの」

「ヤア」と幸兵衛立寄て、「誠に、シヤアよい物が手に入たぞ、敵の悴を人質に取て置ば、此方に六分のつよみ、敵に八分の弱み有、股五郎殿の運の強さ、其がき随分大事にかけ、乳母を取て育るが計略の奥の手」

と悦びいさめば政右衛門、ずつと寄て稚子引よせ、喉ぶへ貫

く小柄の切先、幸兵衛驚き、『コリヤ庄太郎、大事の人質なぜ殺した』

『ハ、ハ、ハ、ハ、此伴を留置、敵の鋒先をくじかふと思し召先生の御思案、お年のかげんか、こりやちと縊が戻りました、武士と武士との晴業に、人質取て勝負する卑怯者と、後々迄人の嘲笑ひ草少分ながら股五郎殿のお力に成此庄太郎、人質を便には仕らぬ、目ざす相人政右衛門とやらいふやつ、其かたはれの此小伴血祭りに指殺したが、頼まれた拙者が金打』

と死骸を庭へ投捨たり。幸兵衛手を打、

『ハ、ア尤其丈夫な魂を見届たれば、何をか隠さふ、股五郎は

奥へきて居るはいの、ば、髯殿を起しておじや、コレ〜股五郎の片腕に成頼もしい人が来たと云て、爰へ呼でおじや』

『スリヤ澤井股五郎殿は此内に居さつしやるか、フウ、シテ外に連の衆でもござるかな』

『イヤ〜供もなしたつた一人、奥底なふ咄してたも』と打明語るは思ふつば、何條しれたる股五郎、手取にするは安かりなんと、手くすね引て待大膽。志津馬は女房が案内に、股五郎が片腕とは、何やつ成共只一討と鯉口くつろげ居合腰、氣配目くばり、互ひにきつと、『ヤアこなたは〜』と一度の仰天。幸兵衛むんづと居直り、

「唐木政右衛門和田志津馬ふしぎの對面満足で有うな」と、先かけられし二人より思ひがけなき女房が心どきまぎ不審顔。

「ナント老人の目利よもや違ひはせまいかの。今宵澤井股五郎と名乗來る年ばい格好聞及びしとは拔群の相違扱は返つて付ねらふ志津馬か但し餘類の者か肌赦させて詮議せんと、わざと一ばいくふた顔三寸俎板見ぬいたれど、我弟子の庄太郎が政右衛門といふ事を、知たは漸たつた今、骨柄といひ手練といひ、適れ股五郎が片腕にせん物と頼めば、早速承知仕ながら、股五郎が有家を根を押して聞たがるは心得ずと思ひしが、

子を一ゑぐりに指殺し、立派に云放した目の内に、一滴浮む涙の色は、隠しても隠されぬ、肉身の恩愛に始てそれと悟りしぞよ。澤井にさせる恩はなけれど、娘お袖を城五郎方へ奉公にやつた時、筋目有人の娘、末々は我一家の股五郎と娶合せん、オ、いかにもお頼み申すと、つい云た一言が、今更引れぬ因果の縁、其後娘は奉公引て歸りしかど、今落日に成た股五郎、見放されぬは侍の義理、かくまふ幸兵衛ねらふは我弟子、悪人に組してくれと頼に引れず、現在我子を一思ひに殺したは、劍術無双の政右衛門、手ほどの此師匠への言譯、去迎は過分なぞや、其志に感じ入敵の肩持片意地も、最早是切、只の百姓町人も侍も、

かはらぬ物は子のかはいさ、こなたは男のあきらめも有、最前
ちらりと思ひ合す、順禮の母親の心が察しやらるゝと、悔めば
門にたへ兼て、わつと泣聲内よりも、明る戸直に轉び入、あへ亡
骸をいだき上、

『コレ巳之助、物いふてたも、かゝじやはいのく、夕べ迄も今
朝迄も、ういつらい、其中にも、てうちしたり、藝づくし、爺御によ
ふ似た顔見せて、自慢せふと、楽しんだ物逢と、其儘差殺す、むご
たらしいと、様を恨るにも、恨れぬ、前生にどんな罪をして、侍
の子には生れしぞ、こんな事ならさつきの時、母が死だら憂目
は見まい、佛のお慈悲の有ならば、今一度生返り、乳房をすふて

くれよかしと、庭に轉びつ這廻り、抱きしめたる我身も雪とき
ゆべき風情なり。志津馬涙を押ぬくひ、

『此上は包まんやうなし、とても、この事に眞實の敵の有所を』

『何が扱、此方も隠しはせぬ、有様は此幸兵衛、最前庄屋へ呼れ
た時、股五郎にあふて来た』

『ヤアすりや敵は庄やの方に』心得たりとかけ出す。政右
衛門引とめ、

『愚々、我々爰に有と聞て、暫時も此地に足を留ふ様がない、早
五六里も行過ても、ふ爰らに敵は居ぬ、此行先も用心して、海道
筋へはよも行まい、道をかへて落たと見へる、親仁様、何と左や

うでござらふがや』

『シタリ黒星其通り、逆も非道の股五郎、天道の御罰にて、どふで討るゝ者なれ共、此岡崎にて勝負さすれば、肩持ねばならぬ幸兵衛薬師堂の山越に中仙道へ落したは、城五郎へ一旦の情、股五郎への縁もこれ迄、思はぬ方便が縁になり、志津馬殿と言かはした、娘が身の果不便やと、見れば籬の小陰より、思ひ切髪墨ぞめのけさにかはりしそぎ尼姿』

『お袖か、オ、出かしかつた、悪人の股五郎に、假にも女房と名の付た、其間違ひがそなたの不運、可愛や盛りの黒髪を』

『ア、コレ申もふ何にも申ませぬ、顔は見ね共いひ號の男持

のがうるさゝに、屋敷を戻つた其時から、尼に成氣で袈裟衣けふ一日に氣が替り、染違ふたる鐵漿付を、元の白齒と墨染に、染直してもはがしても、思ひ初た煩惱の心が兀ぬ佛様御ゆるされてと身を背け、泣ぬ氣を泣親心、股五郎にも志津馬にも縁をはなれたお袖道心、袖ふり合も他生の縁、子に別れた巡禮に菩提の爲のよい道づれ、關役人の我娘、關所くも切手いらす、仲仙道への案内者、勝手につれて行れよと、娘に敵の道引を、道子故に踏迷ふ、未來の契鐘撞木、涙で渡す父母のめぐみも深き觀世音、南無阿彌陀佛なむあみだ、我子は冥途の道しるべ、志津馬唐木も恥合て、しほれぬ表武士の禮師、弟は内證敵同士、此儘か

へるは卑怯者かへせと一聲切付る得たりと請る半蓋に馬子の胴切重ね切眞此通りの手柄を待。まだお手の内は狂ひませぬ。ハ、ハ、ハ、ハ、頓て吉左右くと笑ふて祝ふ出立は侍なりけり三重

岡崎雪降の段註釋

〔九つ〕 九つ刻。夜の十二時。

〔眼八〕 蛇ノ目の眼八といふ馬子。櫻田林左衛門に頼まれて志津馬と政右衛門の跡を蹤けてゐる奴。

〔駄荷の葛籠〕 旅をする時、手荷物を入れ、馬に乗せて歩く葛籠。

〔あたふた〕 —— 押明け忍び込み▲あたふたは慌てること。あたふた押明けとは、慌てること云ふ事と葛籠のフタを明るといふこと、兩方兼た言葉。

〔心も關の忍び道〕 心が急ぐといふ事と、關所のセキを兼た言葉。

〔理不盡〕 道理が有らふが無からふが、そんな事には構はず、ぐんぐん力づくでやること。

〔十てい〕 十手。

〔組子〕 人を組止めて押へる役人。捕方。

〔さうなくも〕 —— 寄付かず▲妄みに寄付かない。

〔丸腰〕 腰に刀を挿してゐない。

〔死活のいけ〕 活を入れて一旦死んだ人を活返らせる術。

〔昨今なれど〕 知合になつて間もない事であるが。

〔手壁にかける〕 手づから面倒を見る。

〔亂酒〕 酒癖の悪いこと。

〔底意〕 心の底。懸値のない本當の心持。

〔連合〕 夫。

〔假名〕 けみやう。こゝでは姓名といふ意味。

〔高て知れたる〕 高の知れた奴。

〔指出〕 差出口。餘計なことをいふ。

〔壁に耳〕 壁に耳あり、天井に目ありといふ諺。

〔歩き〕 —— の小助▲歩きといふのは近所の使ひ走りをする男。

〔役目の不肖〕 不肖とは私といふ意味、自分といふこと▲自分は關役人といふ役目があるから。

〔腰もかどみし〕 —— 海老錠を▲腰が海老のやうに曲つてゐると云ふ事と、葛籠に海老錠を卸すといふ事を兼ねてゐる詞。海老錠といふのは海老の形にこしらへてある錠で、多くは門の貫木などに用ひる。

〔底に劍の葉拵へ〕 葉拵へは双拵へと兼ねた詞。底は心の底。

〔肌も郡山の〕 氷と郡とを懸合せた詞。郡山は大和の郡山で、政右衛門の郷里。

〔目はどみたり〕 どんよりとして据つてゐる。

〔だんない〕 大事な。心配することはなし。

〔少分ながら〕 大した事は出来ないが。

〔血祭〕 昔、支那では戦争の門出に、いけにへの血を供へて軍神を祭り、勝利を祈つたものでそれを血祭といふ▲戦ひの始まり又は戦ひへ出立の際などに殺すこと。

〔金打〕 きんちやう。刀の刃又は鐙を打合せてその響つた言葉に偽りのないのを證明する作法。

〔有様は〕 實は。打明けて云へば。ありやう。

〔半蓋〕 葛籠。蓋が一ぱいに被さらずに上の方だけ被さる故、半蓋といふ。

大坂陣中
SIO KIAS WUS SWAN KUNIN



山田幸兵衛は城五郎に義理があるから股五郎の居所を知らせません▲志津馬は自分が股五郎だと云つて幸兵衛
 を欺く▲政右衛門は關所破りをして幸兵衛に匿まつて貰ふ▲お谷は願職になつて夫の行方を捜ねに出た。—
 此一幕は俗に真切ともいふ。

解附 古本 義太夫名曲全集

伊賀越道中雙六

解題

劍術の名人荒木又右衛門が伊賀の上野に於て、その妻女の弟渡邊數馬を助けて、身の仇河合又五郎の一行を討つたと云ふ名高い話を仕組んだものである。作者は近松半二。

この淨瑠璃は全篇十段に分つてある。即ち第一鶴が岡の段、第二靱負屋敷の段、第三圓覺寺の段、第四郡山宮居の段、第五郡山屋舖の段、第六沼津の段、第七關所の段、第八岡崎の段、第九伏見の段、第十敵討の段にて終る。

全體の筋書の中その半分は第八卷の解説に出て居ります。こゝには荒木又右衛門(唐木政右衛門)を中心とした副餘の分が掲げられてある。

郡山八幡

大和の郡山は可なり繁華な城下町であります。その八幡様のお鳥居前に供揃ひをして大勢の仲間共が、殿様の下向を待受けて居ります。あれは誰方様であらふかと通りがりの旅人が傍の者に尋ねましたら、譽田大内記様だと答へました。

殿様は遊藝がお好きで、取分け能狂言に凝つて居りますので、家中の面々も自然とお狂言を習ふやうになります處から、家老を始め物堅い連中は好い顔を致しません、偶々武藝のお稽古を勤めますと、厭な顔をなさいますので、強ひてはお勧め申さないのであります。

さういふ譯で能狂言に凝りましてから、各所の社へ奉納をすると云つて、神前で舞を舞ふといふ始末。けふも八幡様へ奉納を致しまして、お華表先へ戻つてまゐります。お華表先ではお供の仲間達が可笑しな腰ッ付をして狂言の真似をして、騒いで居ります所へ不意にお立ちとい

ふ知らせて、堂々廻りをして面喰つて居ります、まるで蟻が夕立にでも逢つたやう。

大内記は宇佐美五右衛門を中扨従に召連れ、社殿の方から閑かに出てまゐりました。その跡の方からギス／＼して躓いてまゐつたのは劍道指南番の櫻田林左衛門であります。この櫻田林左衛門といふ人は澤井股五郎の伯父に當る人で、劍術は相當出来る人だけれど、心は餘り宜しくございません。かういふ人が御奉公をしてゐる家へ、同じ家中の宇佐美五右衛門が、靱負の婿に當る唐木政右衛門を推舉したといふのも不思議な縁と云へば云へないことはない。

こゝで少し休息すると云ふので、お側の者が床几をすゝめます。そこへ能の師匠源之進がおづく／＼出てまゐりまして、今日の殿様のお能は格別上出来であつたと褒めますと、大内記は悉皆メートルを上げてしまひます。

その御機嫌の好い時に申上げねばならないと思ひまして、宇佐美は御前に向ひ、先頃手前より推舉いたしました政右衛門の儀に就いてお願ひがござりますが、政右衛門儀、劍道の達者と

申し上げましたばかりで、まだ腕試しを致しませんので、ナニニ彼奴大して出来はすまいなど、蔭口を申す者がございます故、恐れながら御指南役との立合をお許し下さいますやうにと、強つて望みますので、「予は元來武藝を好まん、出来ても出来なくても其様な事は何うでも宜しいが、それほど氣に懸けるなら家老共と相談の上、勝手に取計らへ」といふ至つて無造作なお言葉です。

五右衛門は喜びましたが、林左衛門は鼻であしらつて居ります。「己と唐木とは全然段違ひだ、てんで物になつて居らん、止せば好いのに、フン、馬鹿な奴だ」

やがて大内記は供揃ひをしてお屋敷へ歸りました。五右衛門は後に残つて淨めの神樂を献げよと云ふお言葉ですから、行列を見送つてしまふと、直ぐに社殿の方へ行かふとしました。

「モシ〜」

と呼止めたのは政右衛門の女房のお谷であります。お谷は五右衛門が親元になつて政右衛門

と夫婦になつたのであります。ですから自分の娘のやうに可愛がつてゐるのです。

「あゝ、何うした、何か急用でもあるのか」

と申しましたのはお谷の様子が變だからです。お谷は最前から物蔭で行列の出て行くのを待つてゐたのです。

「私が生家から戻つてまゐりましたから、何ういふものか良人は私に辛く當りました、碌に物も申しません、今日も私に此品を渡しまして親元へ行つて来いと申しただけで、譯を云つてくれません」

「フ、ウ、それは變だナ」

五右衛門は首を傾げながら、その品を受取つて見ますと、それは宇佐美が大切にしておいた長船の刀で、お谷に附けてやつたものです。そして其の中身を検めますと、手紙が巻付けてあります。それは去り状でありましたから五右衛門は腹を立てまして、

「人を踏付にする奴だ！これから出かけて行つて彼奴の性根を確めて来る。併し場合によつては只は置かんぞ。貴様も武士の娘だ。相當の覺悟はある筈だ。その積りで跡から來い」と云つて、青筋を立て、ドシ／＼駆け出して行きました。殿様から云付かつたお神樂の事などは忘れてしまつて。

お谷はもう六月の腹を抱へて居りますから、一緒に走る譯には行きませんが、何うなる事かと案じながら、良人の家へ戻つて行きました。

饅頭娘

唐木政右衛門（荒木又右衛門）の家では御新造のお谷殿が離縁になつたので、若黨石留武助が女房役になつて、勝手元からお座敷から一切取仕切つて面倒を見て居ります。それに今日は、何處からだか知らないが、嫁が來るといふので、女中一人、仲間一人の小さい世帯ですから、武

助は眼の廻るほど忙がしい。

家中の者が氣の毒に思つて、彼方からも此方からも若い女中を手傳ひによこしましたから、家の中が急に騒々しくなりました。

自分の家ではあるが、何となく鬨が高く、そつと様子を伺ひながらお谷は内へ入つてまゐりますと、大層賑やかですから何かお喜びでも有るのかと尋ねました。まさか御婚禮が有るとも云ひ兼ね、一同もぢ／＼して居りますと、下女がツイ口を這らしてしまつたので、嫁入のことが分りましたので、お谷はハツと胸を轟かして、面目無げに俯向いて居りましたが、やがて女達に勝手へ行つてしまひますと、急に悲しくなつて、思はずワツと泣伏しました。武助はいろ／＼になだめまして、一體何ういふ譯で御離縁になつたか旦那様のお心持は能く分りませんが、然し奥様のお腹には確にお世繼がいらつしやるのですから、假に縁は切つたとて血筋は切れやアしません、餘りく／＼してお身體に支つてはいけませんよ、成るだけ氣を強く持つて、こ

「のお家から放れないやうに爲さいましと、力を付けてくれました。

程なく主人が戻る。武助はお谷を一間へ追込みまして、主人に衣服を着替へさせたり何か致します。政右衛門は明あけ六つに、殿様の御前で櫻田林左衛門と仕合をする事になつた、併し今晚祝儀を擧ることになつて居ります故、こゝ二三日のお日延を願ひたいと申上げたけれど、祝儀は私事、お日延の儀は相成らんと重役からの申渡して、仕方が有りませんからお受をして戻つて来たのです。

あゝ草臥れた、少し休まふと云つて、ゴロリ横になると、何時の間にかお谷が後へ来てゐて、枕をソツと出してくれました。

又右衛門、デロリと横目で睨む。

「やう、武助、そこにゐる女は何だ？」

武助まごつくして、

「へい、これはソノ、エート實はソノ、お目見得にまゐつた下女でございます」

「あゝ下女か、のろまさらな奴だ、辛抱出来るかナ、人間は何でも辛抱が肝腎だぞ。今夜はナ、己の處へ嫁が来るのだ、先の嫁は不器量で氣が利かないから追ん出してしまつたが、今度のは若くて綺麗だよ」

なんて云つて居ります。そこへ宇佐美五右衛門が来る。

「ナニ、宇佐美が来た、彼奴頑固老爺だから衣服を着替へねばなるまい、おい、袴を出せ、それから羽織だ」

お谷は勝手を知つて居りますから直ぐに間に合ふ。後へ廻つて羽織を着せようとする、「え、子供ではない」と引つたくつてしまふ。お谷は涙を呑んで隅の方へ小さくなつて居ります。五右衛門がツカ／＼と入つて來まして、政右衛門に果し狀を突付けます。政右衛門は平氣な顔をして居ります。五右衛門は老人で氣が短いからデリ／＼して來る。

「お手前は何故お谷を離縁した」

「自分の女房を自分が離縁するのに不思議はござりまする」

「黙れ！お谷に何ういふ罪がある、何ういふ越度がある」

「ナニ、罪も越度も有りやアしませんが、只だ厭になつたから出したまでの事で」

「な、な、何だと！お手前、本心で申すのか。このお谷は拙者の娘ではない、娘ではないが、拙者親元となり、娘分としてお手前と夫婦にしてやつたのだ。それにお手前、見所ある人物と思ふたればこそ、お上へ推舉いたした譯だ。然るに其の恩を忘れ、拙者を踏付にするとは何たる事だ。最早勘辨相成らん、サア立合へ」

と云つて詰寄りましたから、政右衛門は静かに押し止め、

「いや、それは成りまする」

「何故」

「そこ許も御承知の通り、明日は殿様お目通りに於て櫻田林左衛門と仕合ひを致さねばなりませんから、その前に拙者を斬つてしまつたのでは、お上へ申譯のないことに成りませうがナ」
ぐうの音も出ませんから黙りこくつて居ります。

と、程なく乗物が着きました。お谷は今更のやうに胸をドキ／＼として居ります。やがて乗物から出て来る嫁御を見ますと、七つばかりの女の兒で、綿帽子が帯の所まで被さつてゐるでは有りませんか！乳母が附添つて居ります。一同呆氣に取られて居りますと、奥から出てまゐつたのは母親の柴垣でありますから、お谷は二度悔りて、思はず聲を立てようと致しました。も一つ驚いた事には、その花嫁の綿帽子を取りますと、それは妹の「おのち」でありましたから、お谷は何うした事かと思つて目を見張つて居りますと、柴垣は政右衛門の前へ婿引出物として一通の書付を置きました。それは主人上杉から和田志津馬に賜はつた敵討御免の御書であります。

政右衛門とお谷とは元出来合の仲ですから、公然舅であり婿であるとは申されませんが、斯うして正式に盃をして置けば、舅の仇澤井股五郎を討ちたいからと云つて殿様へお願が出来ますから、それでお谷を離別したと云ふことが始めて分りまして、お谷は嬉しいやら面目ないやらで身體の置所がありませんでした。

五右衛門、膝を打つて感嘆し、流石は政右衛門であるといつて自分の疎忽を詫びました。

さて政右衛門は容を更め、両手を突きまして、御老體にお願ひがあると申しますので、五右衛門は承知の旨を答へますと、何と思つたかハラ／＼と涙を溢しまして、

「切腹をして頂きたい」と申しますので、「ハテネ、妙な頼みだが、この皺腹一つ切つて役に立つものなら、いつ何時でも切りますよ」と、濟ましたもの。

實は明日の仕合ひであるが、林左衛門如きを打倒すは造作もない事であるが、もし自分が仕合に勝てば、林左衛門に代つて指南番に取立てられ、敵討御免のお言葉が下るまいと思ふ、さ

うなると志津馬の助太刀は出来ないので、自分は態と負けて、即刻お暇を願ふ積りである。左様すれば未熟者を吹聴した手前、五右衛門は腹を切ることに成るであらふから、いかにもお氣ノ毒であると云つて政右衛門は男泣に泣きました。

自分としても林左衛門如きに怯れを取つたと有ては、如何にも残念至極であるが、これも已むを得ない。萬事、後で分ることだ。この老ぼれの命一つぐらゐ惜しうはござらんと云つて快く承諾を致しました。

御前仕合

曉六の時、豊田大内記御前に於て櫻田林左衛門と唐木政右衛門（荒木又右衛門）と立合を致します。政右衛門は大きな竹刀を持ち、林左衛門は佐分利流の槍を取つて互ひに身構へました。近習の面々は太廣間の左右に居流れて、片唾を呑んで見物をして居ります。併し、政右衛門と林

左衛門とでは全然段が違ひます。政右衛門の身體には一寸の隙もありませんから、林左衛門は内心怖を抱いて、膏汗をだら／＼流してゐる。もし本気で掛つたら只一打でやられて了ふのですが、態と負けて置いて、お暇を貰はふといふ腹が有りますから、林左衛門の槍で巻落された風に見せかけて、竹刀を其處へ投げ出して、恐入りましたとばかり、両手を突いて平伏しましたから、林左衛門はホット息を吐いて、さも自慢らしく四邊を見廻しまして、

「出る所へ出れば本當の腕前は分るものだ、幾ら蔭で何と云つても生兵法は役に立ちませぬ。こんな拔作を推擧された五右衛門殿は如何にも忠義なお方でござるテ」

など、憎まれ口を叩きました。五右衛門は、もとより腹を切る覺悟でありましたから、御前に向つて、「とんだ鑑定違ひを致しまして申譯がござりませぬ」とお詫を申上げて置いて、肌を押擴げるや否や直ぐに脇差へ手を掛けましたから、大内記は遙にこれを見て、

「五右衛門、切腹には及ばぬぞ、待て／＼」

と大聲で呼びましたから、近習の者が右左から抑へましたので、已むを得ず差控へて居ります。

「林左衛門、政右衛門、これへ出い」

お聲懸りですから兩人並んで席を進みました。殿様は政右衛門に向ひ、「其方、今日の立合は甚だ神妙である」と褒められましたので一同怪訝に思つて居りますと、「其方の腕前は中々林左衛門などの及ぶ所ではないが、其方は新參であるからして態と勝を譲つたものと見た。天晴腕前といひ、また心掛といひ感心なことである。今日より貳百石の加増を遣はす。また當家の指南役を申付けるから左様心得い」と案に相違のお言葉です。政右衛門は當惑を致しましたが、お受をしない譯には行きませんから、たゞ畏まつて居るだけです。

大内記は更に林左衛門に向ひ、「さて／＼其方は不埒な奴であるぞ」と、これは頭からお小言です。「其方は勝を譲られたのを存じながら、予が前に於て廣言を吐くとは何事である。物に

謙るといふことを辨へないのか。それとも政右衛門よりは一段立優つて居るとでも思つて居るのか。然らば其方こそ能くくの抜作である。其方と政右衛門とは腕前に於て格段の相違あること此の大内記體かと思つて居るぞ。其方如き痴呆者は當家に用は無、罷り立て！」

と頭から叱り飛ばされる。不斷から餘り人好きのしない男ですから、誰も同情してくれません。殿様のお言葉だから致し方はない、サア〜お立ちなさいと云つて、寄て群つて押出すやうに致しますから、林左衛門も青朶に鹽で、悄悄と立去りました。

「いづれ後程、黒書院に於て盃を取らせるであらふ」と云つて殿様は席を起たれる。實は、お暇が貰ひたかつたのだと云つて引止める譯には行きませんから、政右衛門は沮喪して了ひました。五右衛門は五右衛門で、折角切らふと思つた敏腹がヒネになると云つて膨れッ面をして居ります。

これを次の間で聞いて居りましたお谷の母柴垣は自害をして了ひます。そこへ御簾中久方御

前がお出ましに成りまして、これは御上意であるが、政右衛門が今日の舉動は如何にも怪しいと思つたが、敵討に出たいばかりに予をたばかつたので、甚だ不都合である、殊に女共を次の間へ引入れたは重々不届であるに依つて永の暇を遣はず、が俄に浪々の身となつては糊口にも困るであらふから、これを賣代にして生活の助けにしたが宜しからふ、これは餞別ではありませんぞ、と云つて殿様秘藏の信國の銘刀を賜はりましたから、政右衛門を始め何れも其の慈けあるお言葉に感泣いたしました。

お谷は五右衛門の手元で、身二つになるまで面倒を見て貰ふことになり、おのちも當分預かつて貰ふ事になりまして、又右衛門は早速出立いたしました。

關 所

三州藤川に新關が出来ました。和田志津馬は此の新關で政右衛門と出逢ふ約束がしてあります。

したから、少し早めに来て見ますと、誰も居りません。ふと見ると、向ふの松の木蔭に掛茶屋
がありますから、そこへ入つて、誰かこゝで待合せてゐた者はないかと聞きますと、さういふ
お方はお見へになりませんでしたと云ふ。では少し待受ることに爲ようと云つて、志津馬は腰
を掛けました。お袖といふ茶屋の娘は志津馬の男振に見惚れまして、虚ッぽの茶碗を盆に載せ
て出したりなど致します。志津馬は切手が無くては此の關所を通ることが出来ないと思ひま
して、當惑いたしました。もと遊所通ひなどして道樂の味を知つて居りますから、お袖の變な
素振に氣が付きまして、自分に思召があるらしいから巧く欺したら何とかなるだらうと思ひま
して、四邊に人のゐないのを幸ひ、そうツと娘の手を握つて、お前に少し頼みがあるのだがネ
と云ひますと、娘は顔を赤らめて嬉しさうに男の手を握つて、私も願ひがありますが一と
申しますので、よし／＼お前の頼みなら何でも聞届けてやる、その代り拙者の頼みも聞いてく
れ、實は一命に關はるほどの大切な用が有つて先を急ぐのであるが、切手を持つて居らぬので

此の關所を通ることが成らぬ、お前は土地の者であるから抜け道を知つてゐるであらふ、教へ
てくれと云ふ。

「いえ、抜け道なら能く存じて居りますが、それはお危うございます。幸ひ私の父親が此の關
所の下役人を勤めて居りますから、何とか工夫したら都合が出来るかも知れません、もし都合
が出来ませんでしたら、その抜け道から何處までともお供を致しませぬ」

と申しますので、志津馬はホツと安心を致しました。

そこへ飛脚が通りかゝりましたので、モシ／＼お休みなすつて行らつしやいと聲をかける。
飛脚のことで先を急ぐのだけれど、此奴女好と見えて、直ぐ目尻を下げてしまつて、ベチャク
チャと種々なことを喋りますので、それとなく鎌を掛けて見ますと、わしは鎌倉の澤井城五郎
様の身内で助平といふものだが、急ぎの御用で岡崎まで行くのだと、チョロリ口が返る。此奴
面白い奴に出逢つた。何か手懸りが有るだらうと思つて氣を付けて居りますと、肝腎な用も忘

れて娘にじやれ付いたり何かして、今度は遠眼鏡を覗いたりして獨りで居りますから、志津馬は其の隙を見て状態からコッソリと手紙を抜いてしまひました。其内に助平は妄みと騒ぎ立てたので逆上せたものか、呟と云つて眼を廻してしまひました。お袖は志津馬を助きたい一心で、恐々紙入から關所の切手を抜き取り、茶釜の湯を頭から打ッ掛けましたので、飛脚はやつと氣が付きましたが、紙入を見ると切手が無い、

「ハテナ、確かに有つた筈だが」

さよろ／＼して搜し廻る、幾干搜したつて有りやアしません。それでは前の立場へ忘れて來たんだ、え、忘えましいと云ひながら、脚は達者ですからドン／＼駈けて行きました。

最早そろ／＼木戸が閉る時刻です。お袖は店を片付けて、志津馬と一緒に關所を通りました。彼方から銀乗物が來ます、お里歸りの奥女中か何かであらふと思ひましたが、駕籠から出て來たのを見ると、それは澤井股五郎では有りませんか。城五郎から附人を大勢よこしたのです

が、海道筋では却て目に立つからと云ふので、態と女の振をして此處まで來たのでした。無論切手の用意が有りますから無事に通る。

續いて遣つてまゐりましたのは櫻田林左衛門と、此の海道筋を繩張にしてゐる蛇の目の眼八といふ馬方で、此奴に何か云付けたと見へて、手附の金を千疋ほど貰つて、左右へ分れてしまふ。

其跡へ走つて來たのは唐木政右衛門です。最前チラと見受けたのは櫻田林左衛門に相違ない、此處らを彷徨いてゐる處を見れば、いづれ股五郎と合體するに違ひないから、こゝで取逃しては何時本望が遂げられるか分らない。——と云ふので、政右衛門は宙を飛んで駈付けたのです。運のないのは仕方のないもので、丁度刻限が切れましたから、木戸がギイと閉る。政右衛門、地輔踏んで悲つたが最早間に合ひません。仕方がないから抜け道へ掛る。その抜け道といふのは、關所の脇の竹藪を潜つて行くと捷徑へ出られるといふ事を聞いて居りましたから、ガ

サ〜と藪を分けて進んで行きますと、跡から来たのは例の飛脚ですが、これも置いてきぼりを喰つて困つてゐる處ですから、よし、己も一番抜けてやれとばかり、止せば好いのに馬鹿な奴で、ノコ〜と藪の中へ匍込みました。

ところが、關所の方にも油断は有りません、彼方此方に張つてあつた鳴子に引ッ懸つたから耐らない、カラ〜と鳴渡ります。ソレ關所破りだ、押へろ！と云ふので役人たちがドカ〜と追懸けて来る。已むを得ませんから切ッ拂つて置いて、兎も角も抜けて出ました。その代りに飛脚は取ッ捕まつて了ふ。

岡崎

藤川の新關に茶店を出してゐたお袖といふは、關所の下役を勤めてゐる山田幸兵衛といふ者の女であります。幸兵衛は今こそ百姓はして居りますもの、以前は劍術、柔らの指南をした

要といふ侍で、中々確かりした人物ですから、上役人に認められてお關所へ勤める事になつたのです。

雪が降つて來ました。お袖は志津馬と相合傘で楽しさうに話しながら戻つて來ました。いつもは道が遠くて仕方がないのに、今日は馬鹿に近くなつたやうな氣がして、もう些と歩いて見ませうかなど、他愛のない事を申しますので、志津馬は困つてしまひ、草臥れてはゐるし、この雪では歩くのも辛いから、早く宿へ連れてつてくれと頼む。お袖も諦めまして、我家へ案内をする。

お袖は家へ入つて見ると、向うの隅に旅葛籠が置いてありますから、「父さんはお歸りになつたのですか」と尋ねます。父親幸兵衛は所用あつて鎌倉へまゐつたのが、存外早く戻りましたので、お袖は少し當が外れたといふ恰好。

それに母親が物堅い人で、娘一人の所へ若い男を泊る譯には行きませんが、マアそこでお茶

でも召上つて……と氣の毒さうに云ひます。

人の足音がしましたので、お袖は慌て、志津馬を奥へ隠してしまふ。つか／＼と這入つて来たのは蛇ノ目の眼八で、今日關所破りが有つて御城下では上を下への大騒ぎだが、前方、このお娘が若い侍と相合傘で戻るのを見た、あれは何處の客人だと、乙ウ絡んで來ましたが、生意氣にも奥へ踏込まふとしましたので、幸兵衛に取ツ捉まつて手酷く遣込められたので、這々の體で逃げて行きました。

志津馬は奥の一間から出て來て厚く禮を述べます。「いや、御挨拶では痛み入る。シテ、あなたは何方へお越しになるのですか」と尋ねますと、「自分ことは岡崎の城下に居られる山田幸兵衛方へまゐるのだ」と答へましたから、老人は不審に思ひ、「その幸兵衛といふのは私でございますが、一體あなたは何方からいになりまし」といふ。「これは不思議の御縁であつた、實は澤井城五郎殿よりの書面を持つてまゐつたので」と云つて、飛脚の狀箱から盗み出した彼の

手紙を差出しましたから、幸兵衛は其れを披いて篤と讀下して居ります。その様子を見てゐた和田志津馬は心の中に、この老人は城五郎に由縁の者に相違ないから、又五郎を押へるには屈強の手引であると思ひ、一計を案じまして、あなたは澤井家のお身内でもあるか、遠い所を御苦勞に存じますと申されたので、いや、私は城五郎の使ではござらぬ、何を隠しませう其の又五郎は拙者でございますと申しましたから、老人は驚きまして、あなたが股五郎殿であるか、宜しい宜しい、委細の事は此の手紙で承知いたしました。ナンノ、志津馬如きが如何ほど參らふとも更に恐れる所はないと世にも頼もしい言葉。

澤井股五郎と聞いて母は恟りしたと云ふのは、娘のお袖が城五郎方へ奉公にまゐつてゐた時、主人の肝煎で嫁婿の談のあつた、謂はゞ許嫁同様の仲ではありますが、お互ひに未だ顔も知らず、それにお袖は何か心に染まない事があつて、その縁談を自分から斷つて、生家へ歸つて來たのでありますから、今では縁が切れてゐるのだが、かうした關りあひに成ると云ふのも、詰

りは結ぶの神の引合せであらふと云ふので、兩親承知の上で二人は楽しい夢を結ぶことになる。夜はだんくぐ更けてまゐりました。裏手から忍んで来たのは蛇ノ目の眼八で、ソツと家へ入つて見ると、旅葛籠の空いたのが有りましたから、その中へ潜り込んで蓋をして丁ひました。

政右衛門は關所を抜けて岡崎の城下の方へやつてまゐりますと、多勢で跡を蹤けてまゐりますから、何とか瞞かして急場を遁れようと思ひ、手早く大小を取つて道端の雪の中へ隠し、無腰になつてトボくく歩いて行きますと、追懸けて来た組子の面々は政右衛門を取巻いて遮二無二引立てようと致しますから、政右衛門は已むを得ず片ッ端から取つて投げました。

それが丁度幸兵衛方の直き傍でありましたから、物音を聞いて表へ出て見ますと此の始末ですから、自分もお關所の役人である以上、本来なら手を貸さなければ成らないのですが、少し考へた事が有つて、捕手の役人に向ひ、それは私の知合ひの男で、飛脚にまゐつたものでございませと明りを立てましたから、役人も安心して、では外の道を捜して見ようと云つて、雪を

衝いて走つて行きました。

何ういふ譯で自分を助けて呉れたのであるか、政右衛門には頓と合點が行きませんでした。幸兵衛は政右衛門の家へ引入れまして、お前さんの柔術は俺の流儀と同じ術であるが、一體お前さんは何處の人だと尋ねます。この老人、只者でないと思つたのも道理、もと勢州山田に於て劍道の指南をしてゐた、政右衛門の恩師でありますから、これはくといふやうな譯で、互ひにその奇遇を喜びました。政右衛門の方では師匠の顔を忘れる筈は有りませんが、何しろ其時分は漸と十四五の少年でしたから、師匠の方では悉皆見違へて了つたのです。政右衛門は矢張伊勢の生れで、荒木田宮内といふ神主の倅でしたが、小さい内に兩親に別れ、もと要と云つた幸兵衛夫婦に哺まれて大きくなつたのですから、生の親よりも恩は深いのでございます。幼名庄太郎と云ひまして、生得武藝を好み、劍術は勿論、槍、長刀、柔術等何れも極意を究め、多くの門弟の中で肩を列べる者は一人もありません。夫婦はホタ／＼して可愛がつて居ります

と、庄太郎十五の年に家出をしてしまいました。師の腕前を見限つたといふ譯では有りませんが、廣く諸流を究めたいと云ふので、武者修行に出たつ限、風の消息も有りませんから、何うしたことかと時折思ひ出しては噫をして居りました、その庄太郎ですから、我が子にでも避り合つたやうな喜びでございます。併しこれが唐木政右衛門であらふとは夫婦とも未だ氣が付きませんから、此の庄太郎を後見にして置けば、婿の身も安泰であらふと思ひ、事情を打明けましたから政右衛門の驚きは一通りでない、ア、困つた事になつたと思ひましたが、素知らぬ顔して、股五郎へ助太刀のことを承諾いたし、その股五郎は何處に居りますと云つて連りに有所を尋ねますけれど、いや此處には居ない、いづれ引合はせるからと云つて庄太郎を抑へて置きました。こんなに遅くなつて何ぞ急用でも出来たのか名主の處から迎ひが来たので、幸兵衛は提燈を灯けて、雪の降る中を出かけて行きました。

政右衛門は師匠の留守の間、老母と世間話をしながら哀を切つて居りますと、表で何かゴト

く云つて居りますから、そつと覗いて見ますと、一人の女順禮が赤坊を抱いて此處の軒下に蹲んでゐるのを、夜番の男が叱つてゐるのです。よく見ると、それは女房のお谷ですから、ハツと思つて當惑したと云ふのは、自分は何處までも政右衛門でない事にしてあるのですから、浮かり顔を出したら化の皮が顯はれますから、知らぬ顔をして居りましたけれど、腹の中の苦しさは一通りでありません。其内にお谷は癪を起して氣を失つた様子ですから、幸兵衛の家内は見兼ねまして、赤ん坊を家へ入れてやり、政右衛門に介抱させましたから、薬を吞ませてやつて呼かけますと、思ひがけない夫の政右衛門でありましたから、お谷は夢かとはかりに取籠つて喜びましたが、この家は股五郎に由縁のある者で、今手掛りが附きさうだからお前が此處へ出ては拙い、もう少しの辛抱だから何處か此の近所で夜を明してくれ、ソレ彼方から提燈が來ると無理に追立てましたが、そこへ戻つて來たのは幸兵衛であります。

家内は奥の一間から赤ん坊を抱いて來まして、今そこで行倒れになつてゐた順禮の子である

が、肌はだの守まもには「大和國郡山唐木政右衛門一子已之助」と記してありますよと申しますと、幸兵衛は喜びまして、ナニ政右衛門の子であるか！それは幸ひである、人質ひとぢに取つて置かふと申しますと、何思なにおもひけん、庄太郎しやうたろうは其子そのこを引奪ひつたつて、突然いきなり小東こがを抜いて、ブツリと咽喉のどを突刺つしましたから、幸兵衛は聲こゑを荒あらげて、何故人質なにひとぢを殺ころしたのだと咎とがめます。

「いや、人質ひとぢを取るなど、いふ卑劣ひれつなことは好まん。他日たじつの名折なをれになる。また相手方あひてに如何様いかやうの尻押しりおしが有あらふとも、其れを恐おそれるやうな庄太郎しやうたろうではござらん」と逆振さかちを喰くはせす。

「豪たかい！」幸兵衛かうべゑは膝ひざを打うつた。「その心底しんていを見抜みぬいた上うへは今直いまぐ股五郎またごろうに引合ひきあはせてあちら」と云いふので奥おくへ聲こゑをかけますと、志津馬しづまは、何人なにびとであるか知らぬが股五郎またごろうに荷擔かた人ひとしようと思いふ程ほどの奴やつ、只一打いちうちに切きつて捨すてようと思おもひ、はや血相けつさうを變かへて出てまゐりますと、庄太郎しやうたろうは、こゝで股五郎またごろうに出逢であふと云いふは天てんの興おこである、一掴つかみに生捕いけどつてくれようと思おもつて、油斷ゆだんな

く待構まちかまへて居ゐりましたが、二人ふたり向むかひ合あつて見ると、二度ど悔くり、開あいた口くちが塞ふまりません。

「何なにうだネ、和田志津馬わだしづまに唐木政右衛門からきまさゑもん、どちらも無事ぶじで好よかつたナ」

と幸兵衛かうべゑは笑わらつて居ゐります。もう疾とつくに見抜みぬいてゐたのです。然しかしながら一旦たんじやう城五郎じやうごろうに頼たのまれた以上いじやうは、武士ぶしとして或ある點てんまで義理ぎりを盡つくさねば成なりませぬから、實じつは只ただ今いま、名主なぬしの所で股五郎またごろうに逢あつて來たのだが、こゝでお前方まへがたに討うたせる譯わけに行ゆかないから、中山道なかやまみちへ落おちしてやつたのであると始めて本當ほんたうの事ことを語かたりました。

お谷たには折角せつかく顔かほを見みせて喜よろこばせようと思おもつたのに、その可愛かほいい子供こどもを殺ころされて了しまつたので、死し骸がいを抱いだきかゝへて氣きも狂くるはないばかりに泣なき悲かなしみます。實じつに馬鹿ばかな事ことをしたものですが、そこはお芝居しばいですから仕方しかたがない。

お袖そでも飛とんだ廻まり合あはせて、志津馬しづまと股五郎またごろうと双方さうほうへ義理ぎりを立て、髪かみを剪きつてしまひました。兩親ふたごころは可愛かほい想さうでなりませんでした。これも浮世うきよの義理ぎりで已やむを得えない事ことです。

蛇ノ目の眼八は幸兵衛に切られてしまひます。

志津馬と政右衛門は直ぐに發足いたしました。

舟宿

志津馬は瀬川から貰ひました妙薬のお蔭で疵も癒りましたので、二人手に手を取つて上方へ登り、名前を林新五と變へて股五郎の行衛を探ねてゐる内に、ふと眼を病ひ付いて、物も能く見えなくなりましたから、伏見まで来て、その舟宿で北國屋といふ家に泊りまして、股五郎の一行を待受けてはゐるものゝ、肝腎の眼が見へないでは何うする事も出来ません。池添孫八は志津馬の供をして來ましたが、こゝは上方から西國筋へ出るには必ず通らねば成らない所ですから、こゝで網を張つてゐれば屹度見付かるに違ひないと云ふので、これも名前を板屋勘兵衛と付けて、按摩取になつて宿屋／＼を流して居りますと、北國屋の直ぐ隣に八百屋が有りま

して、そこに宿を取つてゐたのが櫻田林左衛門であります。此奴中々悪智慧のある奴で、巧いこと志津馬や政右衛門を出し抜いて、股五郎は荷物の中へ隠して、疾に舟積になつてゐるのですから、もし其の船が川口へ出てしまへば最早それ限りで、容易に敵を討つことは出来なかつたのですが、そこは天が恕しませんから、あべこべに股五郎の方が計略に載せられる事になつたのでございませう。

林左衛門は柄にもない頭痛がすると云ふので按摩を呼びましたから、孫八の勘兵衛が變な腰ツ付をして八百屋の店へ入つてまゐります。ナニ座敷へ行くに及ばん、こゝで往來を見ながら揉んで貰つた方が氣保養になつて宜い、と云ふので、店先で按摩を取りましたが、お互ひ顔を見知らないから暢氣なもので、林左衛門は腕自慢か何かで大風呂敷を擴げて居りますと、直ぐ壁一つ隔てた宿屋の座敷では、志津馬と瀬川とが連りに愚痴を溢して居りますのが、耳に入りま

すので、何うやら聞覚えのある聲だナと思つて覗き度がるので、孫八はその侍の目を塞いだり

耳を抑へたりして、氣を揉んで居りましたが、これが林左衛門だとは知りませんから、療治が済むと孫八は行つて了ひます。

林左衛門は何うも氣になつて仕様がなから、そつと覗いて見ると、擬ふ方もない和田志津馬でありますから、只だ一打にしてやらふと思ひましたが、さうすると自分達の所在を又右衛門に知らせて遣るやうなもので、具合が悪い、ハテ何うしたものかと思案をした揚句、ふと思ひ付いたのは竹中贅宅といふ眼醫者で、此奴に金をやつて眼の球の腐つてしまふやうな工夫をさせます。贅宅は大喜びで、先づ手附金として五十兩貰つて、早速志津馬の所へやつてまゐり、好い加減な事を云つて、外の藥を差してやりますと、莫迦に滲て其の痛いこと、云つたらない、やがて七顛八倒の苦しみですから、これは尋常事では無からふと云つて眼醫者を詰りますと、それは南蠻傳來の藥で、眼球は愚か骨まで腐つて死んで了ふのだとせゝら笑つて居る。そこへ林左衛門が出て来て、志津馬を手込にして、早速此事を又五郎に聞かせてやつて、皆なにも安

心をさせて、ゆっくり酒でも呑まふと云つて出て行きますから、志津馬は慌て、刀の鑰を抑へ、股五郎は何處にゐるのかと尋ねますと、つい浮かりして本當の事を喋つてしまふ。

志津馬はバツチリと眼を開きます。奥から按摩の孫八が出て来る。眼醫者も尻からげになつて、あれは孫八の兄池添孫六であると云つて、三人一度に切つて掛りましたから、驚いたの驚かないのではない、一足飛に逃出しましたから、志津馬は追懸けようとする、横合から出て来て立塞がつたのは呉服屋十兵衛であります。氣の立つてゐる處だから耐りません、一太刀浴びてドサリと倒れましたが、尙も跡を追はふとするのを引止めまして、股五郎の一行は川口へは出ずして、伊賀越に鳥羽へ出て、あれから船で廻るやうに模様替をさして置いたから、其の積りで用意をなさいましたと云ふ。この十兵衛といふ男は瀬川の兄で、城五郎には義理が有ります所から、かうして男を立てたのでございますが、町人とは云へ誠に頼もしい人物であります。此人の事は前巻「沼津」の段に出て居りますからお読み下さい。

こゝへ政右衛門と武助とが大坂から駈付けて來ます。愈々敵が手に入ることになつたので其の喜びは一通りでない。

最前大阪から飛脚が來て、志津馬に手紙を渡しましたが、あれは偽手紙で、實は十兵衛の計略であつたのです。その手紙には政右衛門の弟子共が大勢で川口を固めてゐて、政右衛門と武助は尼ヶ崎に待受けてゐると云ふことが書いてありましたのを、林左衛門が聞取つて了ひましたから、股五郎一行は方向を變へて陸路を取るに違ひありません、さうしてまんまと此方の思ふ壺に陥つてしまふので、もう袋の鼠も同じ事です。これと云ふのも皆な十兵衛の働きですから、決して此の恩は忘れないで、瀬川とは末永く添送るからと云つて、安心をさせましたので、十兵衛は然も嬉しさうに笑つて見せました。

敵討

政右衛門、志津馬は孫八と武助を連れて、股五郎の一行を出し抜いて先廻りをして、上野の城下へ入つてまわりまして、代官所へもお届けを致しまして、十分に支度をして、待受けて居りました。

かういふ事とは知りませんから、巧く出し抜いた積りで、悠々として城下の町筋へ入つてまわりました。先拂ひは櫻田林左衛門で、馬から下りようとする所を政右衛門に切つて落される。孫八と武助とは志津馬を圍つて一生懸命に切結んで居ります。股五郎には多勢の附人が有つて、何れも手者でありましたが、政右衛門のために一人残らず切倒されてしまふ。

孫八と武助とは數ヶ所の深傷を負つて、同じ枕に死んでしまふ、可愛想なことをしました。志津馬は股五郎と一騎討です。股五郎は、槍、志津馬は刀で、必死になつて闘つて居りますと、そこへ政右衛門が駈付けて來まして、相手の附人は一人残らず切倒してしまつたから、其奴一人である、踏込んで討取れと呼はりましたから、志津馬は勢を得まして、先づ一太刀浴せ、

だちろぐ所ところを切付けきりつけまして、首尾しゅび好く討取うちとる事が出来できました。(をはり)

昭和四年九月廿五日印刷
昭和四年九月廿八日發行

解説
伊賀越道中双六

不許
複製

編者
玉井清文堂編輯部

東京市神田區表神保町十番地

發行兼印刷者
玉井清五郎

發行所

東京市神田區表神保町一〇
電話神田二二三三番
振替東京三二八番

玉井清文堂

(行印部刷印堂文清)

終

